公益財団法人 日本野鳥の会
Wild Bird Society of Japan

探鳥会スタッフ通信

2017年
9月号

「探鳥会スタッフ通信」は、探鳥会の考え方や様々な運営手法について、全国の連携団体の探鳥会リーダーの皆様と情報交換を行うための通信です。

目 次

◆ミニ室内例会「バーダーズ・カフェ」・・1
◆愛知県支部が第１回「学生による学生のためのバードウォッチング」を開催！・・・・・3
◆探鳥会訪問記・・・・・・・・・・・・・・・5
・八幡川ツバメのねぐら探鳥会（広島県支部）
・ツバメのねぐら入り観察会（鳥取県支部）
・渡良瀬遊水地ツバメのねぐら入り観察会（栃木）
・ツバメのねぐら入り観察会（郡山支部）
◆探鳥会保険集計結果・・・・・・・・・・10
（2017年７月分）
◆普及室からのお知らせ・・・・・・・・・12
・探鳥会リーダーズフォーラムを開催します！
・2017年「全国ツバメのねぐら入り観察会」報告
◆今月の購読者数・・・・・・・・・・・・15
◆探鳥会スタッフ通信の購読について・・16
◆編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・16

◆ミニ室内例会「バーダーズ・カフェ」

探鳥会に参加している会員に、一歩進んで支部のスタッフとして関わってもらうきっかけの一つに、室内例会があります。実際に京都支部では、室内例会「バーダーズ・カフェ」から、いろいろな方々との交流や、支部の活動に関わる会員が生まれているとのこと。京都支部の坂根さんが、「バーダーズ・カフェ」について記事をくださいました。

■「バーダーズ・カフェ」とは

京都支部ではこれまで年に数回会場を借りて室内例会を実施していましたが、それとは別に、少人数でもいいから事務所で気軽に語り合える場を設けようという趣旨で、「鳥談会」というサロン的な室内例会を開催していました。2015 年 6 月に事務所を移転したのを機に、「バーダーズ・カフェ」というソフトな名称に変更して現在まで継続しています。

毎回、会員が話題提供者や講師となり、さまざまなテーマで鳥に関する知見を広げたり、情報を共有したりしています。時間は１時間半から２時間。「カフェ」の名前のとおり、途中で一度コーヒーブレイクを設け、お菓子をつまみながら雑談も楽しみます。参加者は多いときで20人、少ないときは５人ほど。テーマや当日の天候によって参加人数は増減します。

■多彩なテーマで展開

「バーダーズ・カフェ」は、2015年10月から2017年８月までの約２年間で計25回開催しました。平均すると月に１回のペースです。テーマは多彩で、大別すると「鳥の生態」「鳥と文化」「撮影紀行」「映像」の４つに分けられます。

「鳥の生態」としては「リュウキュウサンショウクイの分布拡大」といった科学的な内容のほか、「羽根講座」がシリーズ化されて６回を数えています。これは羽根のコレクターである会員が「夏鳥」「冬鳥」「猛禽」「カモ」など毎回テーマを変えて、羽根や骨、くちばしなどの標本を見せながら鳥の生態について解説するもの。この会員は落鳥や遺体を解体して羽根をコレクションしており、その過程で得た図鑑に書いていないようなリアルな話が聞けるので毎回好評です。

▲羽講座の様子

▲鳥にまつわるギター音楽の演奏

「鳥と文化」は俳句や音楽、映画、スポーツなどを鳥との関連で解説する内容。音楽についてはクラシックで２回、ギター音楽、ジャズ、ポップミュージックで各１回開催しました。ギター音楽の回では、クラシックギターを趣味にしている会員が、鳥を描いた曲を紹介するほか自ら何曲かを演奏。事務所がライブカフェのようになりました。

「撮影紀行」としては、毎年避暑のために北米に滞在する会員が現地で撮影した鳥を紹介したり、何度も舳倉島を訪れている会員が珍しい鳥の写真を披露。「映像」としては、『グース』や『皇帝ペンギン』など鳥の映画やアッテンボローによる BBC 製作のビデオなどを上映しました。

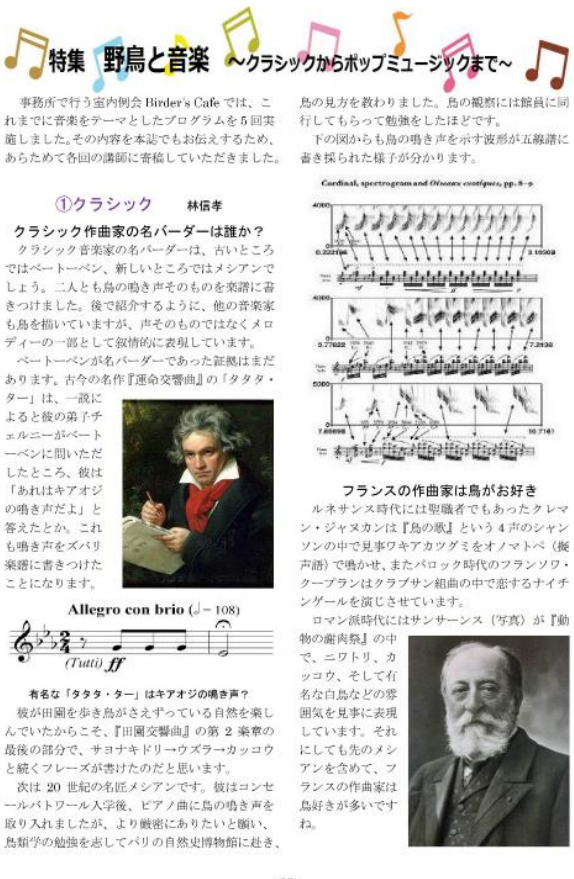
■ミニ室内例会の効用

こうしたミニ室内例会の効用は ３ つあると思います。１つは、真夏など探鳥会が少ない時期のプログラムとして会員参加の機会を提供できること。実際、「バーダーズ・カフェ」は夏に多く開催されています。

２つめの効用は、会員の新しい交流の場になること。例えば、「鳥とクラシック音楽」の回に、探鳥会には参加しない意外な会員が姿を見せて輪が広がるというようなことがありました。また、探鳥会での会員の接点は鳥ですが、俳句や音楽、映画という接点で新しいつながりが生まれたりもします。ギター音楽の回では、「クラシックギターを習いたいのですが…」という若い女性会員が２人参加され、講師と鳥以外の話題で盛り上がっていました。

３つめの効用は、支部報のコンテンツとして展開できること。例えば、「羽根講座」の内容を支部報の記事としてアレンジし、現在「ハネホネ教室」というタイトルで毎号連載しています。北米の野鳥写真を紹介してくれた会員にも紀行文を書いていただき、写真とともに掲載しました。

また、「鳥と音楽」のシリーズが終わった後、支部報で「野鳥と音楽」という特集を組み、クラシック、ギター音楽、ジャズ、ポップミュージックの各回の講師に執筆をお願いして ５ ページの記事を掲載しました。


特集 野鳥と音楽 ～クラシックからポップミュージックまで～

事務所で行う室内例会 Birder's Cafe では、これまでに音楽をテーマとしたプログラムを５回実施しました。その内容を本誌でもお伝えするため、あらためて各回の講師に寄稿していただきました。

①クラシック　林信孝

クラシック作曲家の名バーダーは誰か？

クラシック音楽家の名バーダーは、古いところではベートーベン、新しいところではメシアンでしょう。二人とも鳥の鳴き声そのものを楽譜に書きつけました。後で紹介するように、他の音楽家も鳥を描いていますが、声そのものではなくメロディーの一部として叙情的に表現しています。

ベートーベンが名バーダーであった証拠はまだあります。古今の名作『運命交響曲』の「タタタ・ターン」は、一説によると彼の弟子チェルニーがベートーベンに問いただしたところ、彼は「あれはキアオジの鳴き声だよ」と答えたとか。これも鳴き声をズバリ楽譜に書きつけたことになります。

有名な「タタタ・ターン」はキアオジの鳴き声？

彼が田園を歩き鳥がさえずっている自然を楽しんでいたからこそ、『田園交響曲』の第２楽章の最後の部分で、サヨナキドリ→ウズラ→カッコウと続くフレーズが書けたのだと思います。

次は 20 世紀の名匠メシアンです。彼はコンセールバトワール入学後、ピアノ曲に鳥の鳴き声を取り入れましたが、より厳密にありたいと願い、鳥類学の勉強を志してパリの自然史博物館に赴き、鳥の見方を教わりました。鳥の観察には館員に同行してもらって勉強をしたほどです。

下の図からも鳥の鳴き声を示す波形が五線譜に書き採られた様子が分かります。

フランスの作曲家は鳥がお好き

ルネサンス時代には聖職者でもあったクレマン・ジャヌカンは『鳥の歌』という４声のシャンソンの中で見事ワキアカツグミをオノマトペ（擬声語）で鳴かせ、またバロック時代のフランソワ・クープランはクラブサン組曲の中で恋するナイチンゲールを演じさせています。

ロマン派時代にはサンサーンス（写真）が『動物の謝肉祭』の中で、ニワトリ、カッコウ、そして有名な白鳥などの雰囲気を見事に表現しています。それにしても先のメシアンを含めて、フランスの作曲家は鳥好きが多いですね。

- 10 -

▲支部報の特集ページ「野鳥と音楽～クラシックからポップミュージックまで～」

私はこれを「１粒で２度おいしいコンテンツ」と言っております。室内例会の参加者は 10 人

から 20 人ですから、その場だけで終わらせるのはもったいない。話題提供者や講師はいろいろ材料をそろえたり、パワーポイントにまとめたりしなければなりませんが、そのコンテンツを室内例会が終わった後に支部報の記事として展開すれば、より多くの会員に紹介できます。

■得意分野の発表の場

話題提供者や講師は自分の趣味や得意分野のことを発表できるわけですから、喜んで引き受けてくれます。私が依頼することが多いですが、これまで断られたことはありません。中には、自ら「こんなことをバーダーズ・カフェでやりたいのですが…」と申し出てくれる会員もいます。

他支部でもそうでしょうが、会員の中にはさまざまな趣味や特技、得意分野を持った方がおられます。世界各国で野鳥を撮影されている方、特定の鳥を観察し続けて深い知識を蓄えている方、鳥の切手を集めている方…。ミニ室内例会はそういう会員に発表の場を提供することでもあります。そうして話題提供者や講師を務めた会員が、その後、支部の活動に積極的に関わるようになったケースもあります。それも効用の１つかもしれません。

ミニ室内例会ですから、小さなスペースがあれば実施できます。京都支部の事務所には応接コーナーと会議コーナーがあり、室内例会は会議コーナーで実施しています。15 人で満杯になる狭いスペースですが、多い時は丸イスを並べるなどして対応してきました。

設備としてはプロジェクターとスクリーンが必須です。音楽ものの場合は、PC 用の小さなスピーカー（私物）を持参することもあります。

会員はもちろん、一般にも開放しています。このミニ室内例会に参加された一般の方が、終了後にお試し会員に登録されたこともありました。

「タカの識別講座」「鳥と落語」などこれからもいろいろな企画や、得意分野を持つ会員を探して継続していきたいと考えています。

（京都支部／坂根勝美）

◆愛知県支部が第一回「学生による学生のためのバードウォッチング」を開催！

日本野鳥の会愛知県支部が開催した、第１回「学生による学生のためのバードウォッチング」に参加しましたので、当日の様子をご報告いたします。

【日程】2017 年８月 10 日（木）
14 時 00 分～19 時 30 分
【場所】名古屋市野鳥観察館・藤前干潟（名古屋市港区）、ほら貝池（名古屋市緑区）
【参加者】11 名
【リーダー】４名

■企画の経緯

「学生による学生のためのバードウォッチング」は、愛知県支部会員で、名城大学農学部３ 年生の西村祐輝さんの発案で始まりました。小さいころから鳥が好きで、鳥の研究をするために入学した西村さん。しかし、大学には、意外と鳥が好きな仲間は少なかったそうです。

愛知県支部と名城大学（名古屋市）とのつながりは、支部が実施している「サギのコロニー調査」。参加した学生が、サークルの仲間や後輩を誘うことで、継続的に学生が調査に参加するようになり、西村さんもその一人でした。

「一緒に鳥を見る若者の仲間を増やしたい」という西村さんの想いと、「学生たちが自主的に活動する場を作りたい」という支部幹事のみなさんの想いが合致し、第１回を迎えました。

■概要

前半は藤前干潟を、後半はツバメのねぐら入入りを観察する、という２部構成の企画です。

参加者は、高校生１名、大学生 10 名。その多くは、西村さんがリーダーを務める名城大学野生動物生態研究会のメンバーです。生き物好きだけどバードウォッチングの経験はほとんどない、という方々でした。サポートとして、支部のベテランリーダー３名も参加されていました。

■観察の様子

名古屋市野鳥観察館に集合し、備え付けの望遠鏡で藤前干潟の野鳥を観察。藤前干潟は、日本でも有数のシギ・チドリ類の飛来地。すでに秋の渡りが始まっていて、シギやチドリの群れが飛来していました。

干潟の野鳥は、距離が離れているので、双眼

鏡でじっくり見るのはなかなか難しいもの。そのため、リーダーたちが望遠鏡で野鳥の姿をとらえて、参加者に解説をします。ダイゼン、ソリハシシギ、キアシシギ、アオアシシギ、オオソリハシシギなどが見られました。

▲前半は、藤前干潟で観察。シギやチドリの秋の渡りが始まっていました。

さすがに生物好きの学生の集まりとあって、野鳥だけではなく、移動中も、カニやバッタなど、さまざまな生き物を見つけては楽しんでいました。

当日は、30 度を超える暑さのため、屋外での観察は、予定時間より早めに切り上げて次のフィールドへ。16 時半ごろに藤前干潟を後にし、電車で 1 時間ほどかけて、名古屋市緑区のほら貝池公園に移動。ツバメのねぐら入りを観察しました。

ほら貝池は、およそ 100 メートル四方の池で、その半分ほどの範囲にヨシが茂っています。住宅地の真ん中にある、さほど広くないヨシ原ですが、日没時刻に近づくと、徐々にツバメが集まってきました。ピークには、視界を埋め尽くすほどの数になり、参加者からは、
「すごーい」
「おおー」
「多すぎて怖いくらいだね」
という声が自然ともれていました。

辺りが暗くなり、ツバメがヨシ原の中に落ち着いたころを見計らい、リーダーからまとめの話。西村さんから次回も学生の探鳥会を企画していること、新實支部長から支部の紹介があり、終了となりました。

■参加者の声

大学 1 年生男性：愛知県支部のサギのコロニー調査に参加して、バードウォッチングにも興味がわきました。普段の平日は学校、土日はアルバイトがあるので探鳥会にはなかなか参加できません。今回は夏休みの平日なので、参加することができました。今後も予定が合えば参加したいです。

大学 1 年生男性：サークルでは、ツキノワグマなど哺乳類が観察対象です。サークルで今回の探鳥会の開催を知り、鳥も見てみようと思い、参加しました。

■感想

参加者のほとんどが、同じ大学、同じサークルで活動する学生たちとあって、仲間同士、わきあいあいとした雰囲気でした。ベテランリーダーたちのサポートもあり、夏の名古屋の見どころを満喫できる探鳥会でした。

新實支部長からは「探鳥会にとどまらず、自主的に活動の場を広げてほしい」とのお話も聞かれ、すでに第 2 回の企画（9 月 24 日（日）予定）も進行中とのこと。今後も愛知の学生のみなさんに注目です。

▲夕方からは、ツバメのねぐら入りの観察。あまりの迫力に圧倒されました。

（普及室／江面康子）

◆探鳥会訪問記　～ツバメのねぐら入り特集～

八幡川ツバメのねぐら探鳥会（広島県支部）

【日程】2017 年８月 11 日（金・祝）
　　18 時 00 分～20 時 00 分
【場所】八幡川河口（広島市佐伯区）
【参加者】30 名（会員７名、未入会 23 名）

■探鳥会の概要

広島市西部を流れる八幡川河口は、広島県支部の定例探鳥会のフィールドです。河口付近の埋立地でツバメのねぐら入りが見られることから、８月は、定例探鳥会とねぐら探鳥会の２回を実施しているそうです。

今回の参加者には、会員でない方も多く、中には「昨年参加し、とても感動したので」というリピーターも。周囲にも広めたいと、友達の家族を連れて参加したリピーターもいました。小学生の親子、中高年のご夫婦、おひとりでご参加の 30・40 代女性も数名と、幅広い層の方が参加された探鳥会でした。

■観察の様子

八幡川河口に位置する「みずとりの浜公園」に集合し、リーダーから注意事項の説明を受けて出発。ツバメのねぐらがある埋立地まで移動する間は、干潟にそった歩道を歩きながら、シギやサギなど干潟の鳥を観察しました。

埋立地に入り、見晴らしの良い堤防の上に移動すると、ツバメが集まるまでの間、干潟で観察した鳥の鳥あわせをしました。また、支部の活動の紹介や、八幡川河口の人工干潟ができた経緯についての解説もありました。

リーダーから
「探鳥会の鳥あわせでは、‘たくさんの鳥が見られたかどうか‘が大切なのではない。継続して観察し、記録に残すことで、その土地の環境の変化を知ることが大切」
との話があると、ある参加者から
「そうなのか」
という声がもれました。
やがて日没時刻が近づくと、徐々にツバメが集まってきました。干潟と埋立地の境にある堤防の上からの観察でしたので、海の方から埋立地に向かって飛んでくるツバメの群れは、スピードをゆるめずに、参加者の頭上すれすれを飛んでいきます。スピード感あふれる大迫力のツバメに、歓声が上がります。また、上空高くまで幾重にも重なるツバメの群れに、
「すごいしか言葉がない」
との声も。瀬戸内海を背景に飛びかうツバメの群れは、ここならではの光景です。

▲ツバメを待つ間に鳥あわせと支部の活動紹介

やがて、全てのツバメがヨシに収まると、探鳥会は終了に。埋立地から集合場所の公園へ移動し、解散となりました。

■参加者の声

30・40 代女性：会員ではありませんが、ときどき八幡川の探鳥会に参加しています。ツバメのねぐら入りは初めてです。リーダーの皆さんがとても親切で、博識。知らないことを知ることができるのが楽しいです。

30・40 代女性：ツバメが好きで、今回で３回目の参加です。知人に見せるために動画を撮りました。肉眼でもっと見ておけばよかったです。

■感想

今回の探鳥会は、明るいうちに集合して、干潟の野鳥を観察。その後、ツバメを待つ間に、鳥あわせや支部の活動紹介が行われていました。そのため、時間が有効に活用されていて、かつ、参加者にリーダーの話が伝わっていたと感じました。

また、開催場所の八幡川の河口干潟は、支部が保全に関わるフィールド。会員でない方も多く参加されていたので、支部の活動や地域の自然について理解を深めてもらう、とても良い機会になりました。

（普及室／江面康子）

ツバメのねぐら入り観察会（鳥取県支部）

【日程】2017 年 8 月 12 日（土）
　　18 時 30 分～19 時 30 分
【場所】鳥取県湯梨浜町の休耕田
【参加者】23 名（会員 7 名、未入会 16 人）

■概要

鳥取県中部の湯梨浜町の水田地帯で、休耕田のヨシ原にねぐらをとるツバメを観察しました。この観察会は、地元自治会との共催行事。リーダーの吉田さんによると、6 年前からこの場所でツバメのねぐら入り観察会をしていましたが、地元の方々、特に子どもたちにも参加してほしいと、3 年前に、町の公民館との共催行事にしたそうです。その後、自治会との共催にと変更がありましたが、地域との共催にすることで、公民館や集会所での広報が可能となったそうです。そのため、参加者のほとんどは、近隣にお住まいの家族連れでした。

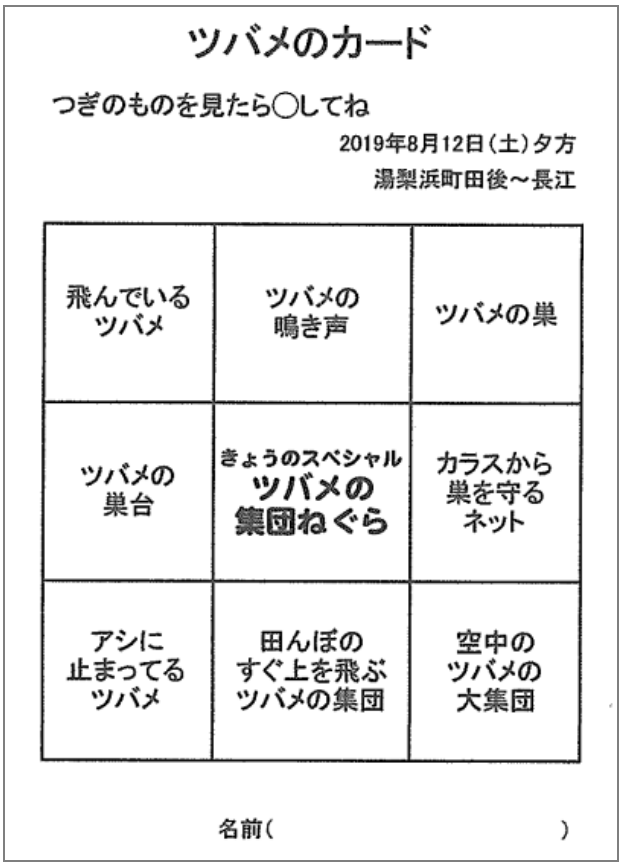
■観察の様子

観察会のはじめに、リーダーの吉田さんからツバメクイズが出題されました。
「ツバメの食べ物は？」
「冬は何をしている？」
「大きさはどれくらい？」
などの問いかけに、答えを予想する子どもたちの声が、次々とあがりました。また、ツバメの観察カードが配布されました。カードには、9 個のマス目にツバメ観察のポイントが書かれていて、見つけたら〇をつけるよう、説明がありました（画像参照）。

ねぐらへ移動する前に、ツバメの巣を観察する場面もありました。集会所近くの美容院に立ち寄り、カラスから守るため、周囲にひもがはりめぐらされたツバメの巣を皆で見学しました。

住宅地を離れて 10 分程歩いていくと、水田の一角にヨシが茂る休耕田がありました。そこがツバメのねぐらです。19 時前にヨシ原の近くに到着したころには、すでに上空をツバメが飛び交っていました。

あたりが暗くなるにつれて、ツバメの数も増えていきました。農道の上を猛スピードで横切る群れや、上空高いところまで埋め尽くす無数のツバメに、参加者から歓声が上がります。やがて、ヨシにツバメがとまり始めると、リーダーが望遠鏡でその姿をとらえ、皆で順番に観察しました。


ツバメのカード

つぎのものを見たら〇してね

2019年8月12日（土）夕方
湯梨浜町田後～長江

飛んでいる ツバメ	ツバメの 鳴き声	ツバメの巣
ツバメの 巣台	きょうのスペシャル ツバメの 集団ねぐら	カラスから 巣を守る ネット
アシに 止まってる ツバメ	田んぼの すぐ上を飛ぶ ツバメの集団	空中の ツバメの 大集団

名前（　　）

▲参加者に配布された観察カード

▲上空を飛び交うツバメの群れを観察。自由研究に取り組む子供の姿も。

すっかり暗くなり、懐中電灯で足元を照らしながら、集会所に戻りました。最後にリーダーの吉田さんから、「今回の休耕田は、人にとっては使っていない土地かもしれないけれど、生き物にとっては大切な場所」というメッセージが伝えられ、支部の紹介、入会案内があり、終了となりました。

■参加者の声

40 代女性：公民館のチラシを見てきました。すごいしか言うことがありません。

40 代女性：（ツバメのねぐら入りは、）毎日ここで起きていることなんですよね。近くに住んでいながら、知りませんでした。

自治会長：去年よりもすごい光景が見られました！

■感想

集合時刻が近づくと、エプロン姿のお母さん、サンダル履きの子どもたちが集まってきて、近所のみなさんが、気軽に参加できる会であることがよく分かりました。クイズや観察カードが用意されていて、子どもたちが楽しく参加している様子が印象的でした。

近所で繰り広げられている迫力のある光景は、みなさんの記憶に深く刻まれたことと思います。自治会との共催によって、地域の方に地元の自然のおもしろさに気づいてもらうという意義は、とても大きいのではないかと感じました。

（普及室／江面康子）

渡良瀬遊水地ツバメのねぐら入り観察会（栃木）

【日時】2017 年８月 19 日（土）
16 時 00 分～19 時 00 分
【場所】渡良瀬遊水地（栃木県栃木市ほか）
【天候】雨のち曇り
【参加者】42 名（会員７名、非会員 35 名）
【リーダー】７名

■探鳥会概要

関東平野の中心に位置する渡良瀬遊水地は、国内最大の遊水地で、絶滅危惧種を含む多くの動植物の宝庫となっています。日本野鳥の会栃木を始め多くの方々の努力により、2012 年にはラムサール条約湿地に登録されました。

ツバメのねぐら入り観察会には、例年 100 名を超す参加者がありますが、今年は、50 名の事前申込制とし、室内講座とセットで開催されました。

■探鳥会の様子

８月は雨が多く、遊水地が通行止めとなる日もありました。この日も大気の状態が不安定で、天気が心配な中での開催となりました。

集合場所は、渡良瀬遊水地会館の会議室。リーダーは、建物の入り口などに道案内に立ち、参加者を迎えました。受付で、会員ではない方については、カード式の受付用紙を使い、住所等の連絡先を記入してもらっていました。この観察会の後も案内等を送れるようにするためです。

参加者が集まったところで、始めの挨拶がありました。観察会の流れと、天候によっては途中で中止する可能性があることを予め伝えていました。

講義は、約 30 分、スライドを使って行われました。渡良瀬遊水地でねぐらの観察を続けているリーダーが、ツバメの生態や渡良瀬遊水地のねぐらについてお話しました。

▲室内講義の様子

講義中、外は激しい雷雨となっていましたが、終わる頃には雨も弱まっていました。観察地までは車移動です。リーダーの車が先頭と最後尾、間に入り参加者を誘導しました。

渡良瀬遊水地は、本州以南最大のヨシ原を擁し、ツバメは広大なヨシ原の中で数日ごとにねぐらの場所を変えます。リーダーが下見を重ね、この日最も可能性の高い場所へ参加者を案内しました。

１８時頃には雨も上がり、車の外に出てツバメが来るのをのんびりと待ちました。１８時２０分頃になると、少しずつツバメが集まってきました。

「ツバメは始めはゆっくり飛びます。暗くなり速く飛び始めると、次第に渦を巻くようなります。」

「ヨシ原のすれすれや、遠くの空にもたくさんいますよ。」
とリーダーが適宜観察ポイントを紹介していました。
ねぐらの位置はやや南にずれたそうですが、万単位の群れが参加者の目の前のヨシ原にも集合し、ねぐら入りの楽しみを十分味わうことが出来ました。観察会後には、
「この天気の中で見られたのはすごいね！」
「講義でツバメの生態についても知れたし、来て良かった。」
と満足の笑顔で話す参加者の姿がありました。

■まとめ
参加者の中には、近隣の栃木、茨城、群馬、埼玉だけでなく、東京、神奈川、岩手からいらした方もいました。観察会は広報を始めてすぐに満席になったそうで、渡良瀬遊水地のツバメのねぐら入りへの注目度の高さが伺えました。
今年、事前申込制としたのは、入会促進につなげたいという思いがあったからだそうです。今回は、天気の心配もあり、積極的な入会案内は行われませんでしたが、会員ではない方には引き続き探鳥会の情報をお届けし、次回の参加に繋げていきます。

（普及室／堀本理華）

ツバメのねぐら入り観察会（郡山支部）

郡山支部のツバメのねぐら入り観察会に参加してきました。郡山支部では、約 20 年も前からツバメのねぐら入り観察会を実施しています。当初は市街地にある五百淵公園というため池のヨシ原で開催していましたが、ヨシ原の工事が行われたことで環境が改変され、ねぐらが消失してしまい、観察会を継続することができなくなりました。
現在の浜尾遊水地は、その代わりの場所として、約 10 年前からねぐら入り調査と観察会がはじまりました。

【日時】2017 年 8 月 27 日（日）
16 時 30 分～18 時 30 分
【場所】浜尾遊水地（福島県須賀川市）
【参加者】42 名（会員 25 名、非会員 17 名。未入会の内、「探鳥会のご案内」「メール送信」を受け取っている方が 4 名。）
【リーダー】3 名

■浜尾遊水地
平成 10 年 8 月に阿武隈水系では、大きな洪水の被害を受けました。このため、国交省により阿武隈川が増水したときの対策として遊水地が計画されました。この遊水地ができたことで、阿武隈川の増水時に水をためて水位調整を行うことで洪水を防ぐことができるようになりました。広さは 62ha ほどあります。浜尾遊水地の管理については、以前は国交省が有識者と一般公募による市民で構成された協議会で議論されていましたが、最近では管理も自然の遷移にゆだねられており樹林地化が進行しているとのことでした。支部としては、ヨシ原の乾燥化によりまた、ツバメのねぐらに影響があるのではないかと心配しているとのことでした。

■浜尾遊水地のツバメのねぐら入り観察会
浜尾遊水地では、ピーク時で約 3 万羽のツバメのねぐら入りが観察できます。支部の観察会が始まって 10 年ほど経過しましたが、そのうち 5 年くらい前までは、支部の会員向けに小規模に実施されていました。ところが、近年では「ツバメのねぐらマップ」に掲載されたこともあり、知名度が上がったのか、近隣の支部や会員ではない一般の方の参加者が増え続けているということでした。この日も、約 40 人ほどの人が参加され、中には盛岡や千葉県から参加された方もいました。

■観察会の様子
観察会の集合は基本的には現地集合でしたが、自家用車を持っていない方のために、車での送迎用の集合場所も用意されていました。支部のリーダーの自家用車に分乗して現地まで移動します。約 30 分ほど走り、須賀川市特産のリンゴ園に隣接した浜尾遊水地の堤防に到着しました。すでに数十台の車が狭い駐車場に集まっていました。
浜尾遊水地に到着して、土手に上がるとそこからは約 60ha の広大な遊水地が一望できました。すぐに熊谷支部長と渡邉事務局長が近づいてこられ、ご挨拶してくださいました。支部

長によると、毎年参加者が増えてきており、ツバメのねぐら入りを観察できる場所として注目を浴びてきていることを実感されているとのことでした。

観察会が始まり、冒頭に熊谷支部長から挨拶があり､3名のリーダーの方が紹介されました。そして、浜尾遊水地のできた経緯や管理の現状についてのお話があり、支部としてこの遊水地に大変関心を持って関わっていらっしゃることがうかがえました。その後、土手の上を走るランナーに注意しながら遊水地に面して横に広がり、ツバメがやってくるのを待ちました。

▲観察会冒頭であいさつする熊谷支部長

この日は天気がよかったことが災いしたのか、なかなかツバメが集まらず、本当にツバメが来るんだろうかと支部長はじめ支部の皆さんはひやひやされていました。この日の日没は18 時 15 分。日没後の余韻でまだ明るさが残る中、ようやく上空にツバメが集まりはじめました。肉眼では見えませんが、双眼鏡で覗くと、無数の点が空をおおっているのがわかります。

そのうち、徐々にツバメの飛翔高度が下がってきて、時々土手の上をかすめるようにして飛び去るツバメに参加者から歓声が沸きます。双眼鏡でヨシ原の表面を見ると、無数のツバメが流れるように横に飛び去り、早いものはヨシに止まり始めているのがわかります。「このままねぐら入りは終わるのかな」と思っていたところ、何かの拍子でいったん止まったツバメが再度舞い上がり、上空に黒い塊を作りながらうねるように広がっていきます。何度かこれを繰り返したのちに、望遠鏡や双眼鏡ではツバメを追えなくなったところでねぐら入り観察会は終了しました。

■まとめ

今回の観察会に参加して、ツバメのねぐら入りといえば関西方面の支部の取り組みが先駆者として有名ですが、郡山支部も 20 年も前からツバメのねぐら入り観察会に取り組んできたということにまず驚きました。そして、最初のフィールドの五百淵公園のねぐらは消失してしまいましたが、その経験があるからこそ現在のフィールドである浜尾遊水地のヨシ原を心配されているのでしょう。

浜尾遊水地はツバメのねぐら入りの観察スポットとして、大きなポテンシャルを秘めていると感じました。ツバメのねぐら入りとして有名になることで浜尾遊水地のヨシ原の重要性が浮き彫りになり、ヨシ原を保全していこうという動きの助けになればと思います。

（普及室／箱田敦只）

◆探鳥会保険集計結果（2017 年 7 月分）

7 月は 68 支部からご報告をいただき、計 185 回の探鳥会が開催され、のべ 3,919 人が参加されました。

表 1. 7 月の探鳥会保険集計結果（2017 年 8 月 15 日現在）

支部	開催回数（回）	参加者数		スタッフ数（人）	合計人数（人）
		会員（人）	非会員（人）		
小清水	−	−	−	−	−
オホーツク支部	2	45	13	2	60
根室支部	−	−	−	−	−
釧路支部	−	−	−	−	−
十勝支部	−	−	−	−	−
旭川支部	1	5	0	2	7
滝川支部	1	13	1	2	16
道北支部	0	0	0	0	0
江別支部	−	−	−	−	−
札幌支部	3	84	38	8	130
小樽支部	2	6	18	4	28
苫小牧支部	−	−	−	−	−
室蘭支部	0	0	0	0	0
函館支部	−	−	−	−	−
道南桧山	2	20	6	4	30
青森県支部	−	−	−	−	−
弘前支部	2	14	7	2	23
秋田県支部	3	20	3	3	26
山形県支部	1	5	1	2	8
宮古支部	−	−	−	−	−
もりおか	1	18	8	4	30
北上支部	1	5	0	1	6
宮城県支部	3	40	11	5	56
ふくしま	2	41	0	3	44
郡山支部	2	38	0	5	43
二本松	−	−	−	−	−
白河支部	2	2	0	10	12
会津支部	0	0	0	0	0
奥会津連合	−	−	−	−	−
いわき支部	1	21	4	1	26
福島県相双支部	−	−	−	−	−
南相馬	−	−	−	−	−
茨城県	5	32	22	5	59
栃木	−	−	−	−	−
群馬	7	58	22	18	98
吾妻	1	11	8	2	21
埼玉	5	139	62	37	238
千葉県	5	45	17	22	84
東京	12	386	18	57	461
奥多摩支部	7	92	15	24	131
神奈川支部	6	101	29	19	149
新潟県	−	−	−	−	−
佐渡支部	−	−	−	−	−

富山	2	19	9	4	32
石川	1	16	6	3	25
福井県	0	0	0	0	0
長野支部	3	25	2	6	33
軽井沢支部	1	10	10	1	21
諏訪支部	1	4	8	2	14
木曽支部	1	6	5	2	13
伊那谷支部	2	8	12	4	24
甲府支部	2	38	4	4	46
富士山麓支部	1	13	5	2	20
東富士	−	−	−	−	−
沼津支部	1	11	0	2	13
南富士支部	1	12	0	1	13
南伊豆	1	6	0	2	8
静岡支部	2	24	3	5	32
遠江	2	37	4	7	48
愛知県支部	8	121	107	20	248
岐阜	−	−	−	−	−
三重	0	0	0	0	0
奈良支部	3	72	9	6	87
和歌山県支部	−	−	−	−	−
滋賀	4	22	34	8	64
京都支部	3	43	33	9	85
大阪支部	20	209	38	87	334
ひょうご	3	37	57	16	110
NPO法人日本野鳥の会鳥取県支部	3	29	17	3	49
島根県支部	2	4	1	2	7
岡山県支部	2	42	39	8	89
広島県支部	3	18	10	3	31
山口県支部	3	22	7	3	32
香川県支部	2	74	15	3	92
徳島県支部	5	63	5	5	73
高知支部	1	11	10	1	22
愛媛	4	47	24	6	77
北九州支部	1	15	0	1	16
福岡支部	5	57	3	12	72
筑豊支部	3	28	0	3	31
筑後支部	3	20	62	3	85
佐賀県支部	1	11	0	2	13
長崎県支部	−	−	−	−	−
熊本県支部	2	40	20	3	63
大分県支部	3	28	15	3	46
宮崎県支部	2	26	6	2	34
鹿児島	1	21	6	4	31
やんばる支部	−	−	−	−	−
石垣島支部	−	−	−	−	−
西表支部	−	−	−	−	−
全国	185	2530	889	500	3919

備考：-は保険の申請がなかったことを示しています。

（普及室）

◆普及室からのお知らせ

■探鳥会リーダーズフォーラムを開催します！■

今年度の探鳥会リーダーズフォーラムは、愛知県にて１月に行います。みなさまのご参加をお待ちしております。

◆◆◆実施概要◆◆◆
＜時　期＞　2018 年 1 月 20 日（土）13:00
～21 日（日）12:00
＜主　催＞　（公財）日本野鳥の会　普及室
＜旅行実施＞　（株）南海国際旅行
＜会　場＞　邦和セミナープラザ
（愛知県名古屋市）
＜対　象＞　支部、連携団体の探鳥会に関わっている方
＜定　員＞　50 名（定員になり次第締め切り）
＜参加費＞　10,000 円（1 泊 2 日）
＜プログラム＞
1 日目　13:30　オリエンテーション
ワールドカフェ「探鳥会について話そう（仮題）」
15:00　アイスブレイキング
15:30　全体会
16:00　第 1 分科会
18:00　チェックイン、休憩
18:30　夕食
19:30　懇親会
2 日目　7:30　朝食、チェックアウト
8:45　第 2 分科会
10:15　休憩、移動
10:30　全体集会
12:00　終了

＜お申込み＞
■申込方法：下記の申し込み専用サイトからお申込ください。
https://www.pac-sys.net/nmes-nankai/entry/?tanchou-kantou2018
もしくは、件名に「リーダーズフォーラム申し込み」と記入し、（1）～（5）までを明記の上、tancho-staff@wbsj.org までお送りください。
（1）お名前　（2）ご住所　（3）電話番号　（4）メールアドレス　（5）希望分科会 A、B から第 2 希望まで選択（A-①・A-②・A-③）（B-①・B-②・B-③）

■申込期間：2017 年 9 月 18 日（月祝）～2017 年 12 月 15 日（金）（定員になり次第締切）

■その他フォーラム全般についてのお問い合わせ：
（公財）日本野鳥の会　普及室　堀本、井上、箱田
〒141-0031
東京都品川区西五反田 3-9-23 丸和ビル
Tel：03-5436-2622
Fax　：03-5436-2635

▲昨年の様子

◆◆◆分 科 会◆◆◆

20 日　分科会 A（1 日目）
A-①「参加者から支援を引き出す！ツバメのねぐら入り観察会の工夫」　堀本理華（普及室）

鳥がいない時期の骨休み企画として人気が出てきたツバメのねぐら入り観察会。実は、その参加者はほとんどは会員ではない一般の方。そして、年々その参加者の数は増加の一途をたどっており、最近では会員増やグッズ販売の機会としても見直されてきています。

この分科会では、非会員が多く集まるツバメのねぐら入り観察会で、どうしたら参加者から入会や寄付などの支援を引き出すことができるかその工夫について考えてみたいと思います。

A-②「ヤング探鳥会は支部に何をもたらすのか？人材発掘？先行投資？会継続？」
石亀明（東京）

３年前、東京と大阪の２支部だったヤング探鳥会の開催支部は、現在では、栃木、東京、埼玉、滋賀、京都、大阪、奈良、岡山に加え、今年度は愛知、佐賀が加わり 10 支部にまで広がってきました。これまでリーダーズフォーラムでは、開催支部拠点を増やすことを主軸に、支部同士の交流や情報交換を行ってきました。今回の分科会では、交流の段階からもう少し踏み込んで、ヤング探鳥会の目指すべき方向性の確認や共通課題の抽出などをおこないたいと思います。

A-③「野鳥の会育ちの子供たちが社会を変える」　笠原逸子（神奈川支部）

支部や財団の中で、子どもを対象とした事業を行うためにはどのような環境が必要なのかについて考えてみたいと思います。

東富士支部で長年取り組んできた「キッズ」の取り組みをご紹介いただき（予定）、子どものころから支部の探鳥会で育ち、現在では支部の活動を支えている方からご自身の体験談をお聞きします。

21日　分科会B（2日目）

B-①「お試し会員を増やそう！探鳥会の進め方」　樋口公平（神奈川支部）

現在全国で展開中の「会員を増やすための探鳥会」。「参加者の中からなるべく多くの方にお試し入会してもらいたい」が全国の皆さん共通の気持ちだと思います。少しでも多くの方にお試し会員になってもらうにはどうすればよいのか。ここでは営業の視点で心の流れをウォッチングする「マインドフロー」という方法を提案します。これらがたたき台となり、各地で色々な方法が確立していくとうれしいです。

B-②「さて困った、野鳥の会の底力　～サギ調査の課題を解決する～」　新實豊（愛知県支部）

愛知県支部が行っているサギコロニー調査。実はこの調査を始めた当初、大きな課題にぶち当たりました。分科会ではその課題を皆さんならどう解決するかを考えてみたいと思います。実際に愛知県支部であったケースを題材にした設定の中で、参加者同士で議論して解決策を導き出します。

B-③「葛西臨海公園オリンピックからラムサールへ～登録後の利活用を考えよう～」
落合はるな（東京）

かつてオリンピック会場問題で揺れた葛西臨海公園（東京都江戸川区）。現在は開発の危機は去り、日本野鳥の会東京による、ラムサール条約登録の運動が行われています。

この分科会では、ラムサール条約に登録されたフィールドの保全と利用に対して、日本野鳥の会の会員のネットワークを生かしてどんなことができるか考えていきたいと思います。

■2017 年「全国ツバメのねぐら入り観察会」報告■

９月３日（日）大分県支部の開催で、今年計画された「ツバメのねぐら入り観察会」が全て終了しました。今年財団では、以下の広報を実施しました。

（２０１７年７月号参照：
http://www.wbsj.org/info/shibu/tancho/staff201707.pdf）

（１）パンフレット「ツバメのねぐら入り観察会」送付（全国約 45,000 名）
（２）財団 HP 上に特設ページ開設
（３）一斉メール送信（全国約 48,000 名）
（４）野鳥誌７、８月号へ掲載

（１）（３）の広報の成果について、９支部からご協力いただき、観察会の参加者名簿から調べました。その結果、会員外の参加者のうち、平均 21 名（38%）の方が当会の広報を受け取っていることが分かりました。（表 2）

表２．当会の広報による参加

支部	日程	開催場所	全参加者数	会員外の参加者数	パンフレットやメールを受け取っている人数（割合）	
郡山支部	8/27	浜尾遊水池★	42名	14名	4名（29%）	
栃木	8/19	渡良瀬遊水地★	42名	35名	23名（66%）	
群馬	8/26	多々良沼	92名	55名	25名（45%）	
奥多摩支部	8/5	多摩川	197名	151名	89名（59%）	
愛知県支部	7/30	ほらが池	95名	65名	37名（57%）	
大阪支部	8/2	赤坂下池	68名	43名	20名（47%）	
〃	8/11	平城宮跡★	54名	31名	4名（13%）	
和歌山県支部	8/6	紀ノ川（六十谷）★	16名	16名	3名（19%）	※
鳥取県支部	8/12	湯梨浜町休耕田	21名	16名	2名（13%）	
広島県支部	8/11	八幡川	26名	23名	7名（30%）	

★事前申込み
※パンフレットへの掲載なし

（１）パンフレットや（３）メールは、財団が作成している『おさんぽ鳥図鑑』などの小冊子に申し込んでくださった方にお送りしています。引き続き、支部の活動エリア内で小冊子プレゼント葉書が設置できる場所がありましたら、普及教育グループまでお知らせください。

（公財）日本野鳥の会　普及室
普及教育グループ
TEL：03-5436-2622
E-Mail：nature@wbsj.org

◆今月の購読者

探鳥会スタッフ通信９月号の電子メール版の購読者数は、先月から 71 名減って 810 名です。各支部の購読者数は、「財団からの配信者数」と「支部からの転送による配信者数」の合計です。

表３．探鳥会スタッフ通信９月号電子メール版の購読者数（2017 年９月１４日現在）

支部	購読者数
小清水	1
オホーツク支部	6
根室支部	0
釧路支部	2
十勝支部	1
旭川支部	3
滝川支部	1
道北支部	1
江別支部	0
札幌支部	4
小樽支部	3
苫小牧支部	2
室蘭支部	5
函館支部	0
道南桧山	1
青森県支部	1
弘前支部	4
秋田県支部	3
山形県支部	4
宮古支部	1
もりおか	4
北上支部	2
宮城県支部	39
ふくしま	4
郡山支部	1
二本松	1
白河支部	2
会津支部	2
奥会津連合	0
いわき支部	1
福島県相双支部	0
南相馬	0
茨城県	22
栃木	59
群馬	24
吾妻	1
埼玉	38
千葉県	21
東京	64
奥多摩支部	48
神奈川支部	21
新潟県	2
佐渡支部	1
富山	3
石川	29

支部	購読者数
福井県	10
長野支部	1
軽井沢支部	1
諏訪	6
木曽支部	1
伊那谷支部	1
甲府支部	4
富士山麓支部	0
東富士	0
沼津支部	3
南富士支部	3
南伊豆	2
静岡支部	2
遠江	9
愛知県支部	44
岐阜	5
三重	19
奈良支部	2
和歌山県支部	4
滋賀	19
京都支部	30
大阪支部	26
ひょうご	15
NPO法人日本野鳥の会鳥取県支部	10
島根県支部	12
岡山県支部	27
広島県支部	9
山口県支部	3
香川県支部	6
徳島県支部	6
高知支部	1
愛媛	15
北九州	11
福岡支部	12
筑豊支部	21
筑後支部	5
佐賀県支部	5
長崎県支部	1
熊本県支部	14
大分県支部	4
宮崎県支部	4
鹿児島	3
やんばる支部	0
石垣島支部	1
西表支部	1
合計	810

（普及室）

◆探鳥会スタッフ通信（電子メール版）の無料配信について

探鳥会スタッフ通信は、支部の探鳥会スタッフならどなたでも受信できます。（無料です）
ご希望の方は、「探鳥会スタッフ通信希望」と明記のうえ、①支部名 ②担当している探鳥会名 ③お名前 ④ご住所 ⑤電話番号 ⑥メールアドレス（パソコンやスマートフォンのアドレス）を記入し、tancho-staff@wbsj.org へお申し込みください。バックナンバーとともにメール版を送信いたします。
配信を希望されない、メールアドレスの変更などについても、tancho-staff@wbsj.org までお知らせください。

★編集後記

だんだんと日が短くなってきましたね。みなさまはいかがお過ごしでしょうか？
もう一度、近所のツバメのねぐらを見に行きたい…と思っているうちに、シギ、チドリやカモたちが見られるようになり、「秋だなあ」と感じています。

一方で、「探鳥会リーダーズフォーラム」や「会員を増やすための探鳥会」のパンフレットなど、先々の準備も着々と進んでおりますよ。「探鳥会リーダーズフォーラム」の申し込みは今月 18 日から始まります。参加のご検討を、ぜひよろしくお願いいたします。

（普及室／井上奈津美）

日本野鳥の会
探鳥会スタッフ通信 第 54 号
◆発行
（公財）日本野鳥の会　2017 年 9 月 15 日
◆担当
普及室　普及教育グループ
〒141-0031
東京都品川区西五反田 3-9-23 丸和ビル
TEL：03-5436-2622
FAX：03-5436-2635
E-mail：tancho-staff@wbsj.org